空間・社会・地理思想 11号, 92-110頁, 2007年
Space, Society and Geographical Thought

人間の領域性─その理論と歴史
第2章　領域性の理論

ロバート・D・サック *
（山﨑 孝史 **訳）

Human territoriality: Its theory and history
Chapter 2　Theory
Robert David Sack
(Cambridge: Cambridge University Press, 1986)

既に見たように，領域性の定義[訳注1]には相互に関係した3つの様相が含まれる。領域性は区域による分類の方式，境界による伝達の方式，そして強制またはコントロールの方式を与えねばならない。本章で議論されるのは，この3つの様相に，別のおよそ7つの効果が結び付けられ，それらの効果が，もとの3つとともに，およそ14の特徴の組み合わせ作り出すことである。断っておくが，正確な数は重要な問題ではない。組み合わせは10ないし14よりも少なくまとめることができる。重要なのは，領域性の定義が，領域的戦略による潜在的な利点の範囲をはっきりと示すのに十分で，かつ正確にして有益な一般性のレベルで豊かな意味を持たねばならないことである。これらの効果を特定し，どのようにお互いに結びついているのか説明し，そしてそれらが採用される諸条件を示すことから，領域性の理論は構成される。

領域性の理論は2つの部分から示される。第一に，領域性が多様な社会歴史的文脈から概念として抽象化される。これによって，領域性の内的な論理を記すこと，つまり非領域的ではなく領域的な戦略を利用する理由をなす領域性の諸効果の範囲と，それら効果の相互関係を明らかにすることができる。第二に，領域性の理論は，特定の歴史的文脈が領域性の特定の潜在的効果に依拠すると仮定し，非常に一般的な意味で，歴史的文脈を領域的効果と符合させる。

領域性の理論は経験的でありかつ論理的である。最初の3つの傾向[訳注2]は領域性の定義から引き出されている。その他の傾向は，定義から完全に引き出すことはできないが，それにもかかわらず論理的には定義と相互に結びついている。これ以後の分析を理論と呼ぶことは，人々とその領域の利用に対して機械的なアプローチをとることを意味しない。逆に，理論によって，領域の効果が，物理的なものから象徴的なものにまで及ぶ，つまり空間分析という広い研究領域があつかう範囲で生じる，可能性として示されるであろう。また，理論という言葉は，領域性について正確な予測ができるということも意味しない。人間の行動はあまりに「自由度が高い」ので，何らかの結果について正確な社会的予測を行うこと

*　ウィスコンシン大学マディソン校
**　大阪市立大学
Ⓒ 2007 by Cambridge University Press

は不可能である。むしろ，ここで理論が意味するのは，経験的かつ論理的に相互関係があって，複雑な行為を理解する助けとなる一組の前提を明らかにすることである。言い換えれば，理論によって理解したり説明したりすることはできるが，将来何が起こるかを正確に予測することはできないのである。

自然科学からのアナロジーを用いれば，領域性の理論の複雑な構造をもう少しわかりやすく示すことができよう。理論は 2 つの部分—諸効果の範囲と歴史的事例におけるそれらの利用—を含むと述べたが，機械的な印象を与える危険を冒しつつも，以下のように言うことができる。最初の部分は，領域性の「原子論的」構造を検討することに似ている。つまり領域性の 3 つの様相（分類，伝達，そして強制）はその「核」であり，10 の主要な効果ないし傾向，そして 14 のそれらの組み合わせは，その「原子価」である。これらは，もし領域性が利用されるならば，そのときによりどころとされる効果間の潜在的な結びつきを形成する。第二の部分は，社会歴史的な組織の類型を示す年表の中に領域性を位置づけ，社会歴史的文脈が領域性を利用するときに現れると期待される原子結合を示唆することに似ている。歴史的文脈と領域的効果との間の結合を描写することは次章以降の目的となる。

領域性の理論自体に触れる前に，方法と術語に関してもう少し整理しておこう。領域性の効果は単純な関係ではない。それらは，原子ではなく，人々に関わることなので，領域性の潜在的「理由」や「原因」，あるいは潜在的「結果」や「効果」と呼ぶほうがふさわしい。名称の組み合わせの適切さは，個人（ないし集団）が新しい領域を作り出すか（この場合の適切な対句は理由／原因である），すでに存在しているものを利用しているのか（この場合の適切な対句は結果／効果である）によって左右される。あるものが理由あるいは原因であるのか，結果あるいは効果であるのかは，特定の事例を詳しく見てみないとわからない。しかしそれでも二組の対句の間にほとんど違いがないと主張する人は多い。単純化のために，本書では理由，原因，結果，効果は交替で用いられ，これら用語があらゆる事例に適用可能であることが示されるであろう。そして「潜在性」あるいは「傾向」という用語は，これら 4 つすべてのオプションに用いられる。

こうした単純化の努力にもかかわらず，領域性の理論は依然として複雑で専門的である。10 の*傾向*と 14 の*組み合わせ*，合計にして 24 の*効果*について記述せねばならない。これは避けることができない。領域性の歴史に関する章は理論の主張にそって構成されているので，理論は早い段階でできるだけ十分に展開しておかなければならない。24 の効果のそれぞれには常識的な名前が与えられる。さらに，理論の内部構造をはっきりさせるために，最初の 10 の傾向それぞれには番号が，14 の組み合わせそれぞれには文字があてられる（たとえば，第一の傾向—分類—は *1* と識別され，第三の組み合わせ—複雑なヒエラルキー—は *c* と識別される）。番号と文字は，相互参照のためにこの章でのみ用いられる。本書の残りの部分では，傾向と組み合わせはそれ自身の名前で呼ばれる。文字と番号を示さないことで，文中で特定の傾向が示されている事実に，読者が気づきにくくなるかもしれない。しかし，効果の名前だけを用いても，読者が名前の意味を識別することは依然としてできるであろうし，理論の構造がもつ押し付けがましさと読みづらさを減らすこともできるであろう。

領域性の社会的構築

特定の社会的文脈からある程度離れて，領域性を概念的に独立させ記述することは，空間分析における地理的距離の意味を探求することと似ているように思える [1)]。一つの重要な違いは，領域性が物理的な距離とは異なるやり方で，常に社会的に，あるいは人間の判断で構築されていることである。初歩的な意味で，距離を想像し，記述し，そして計測する行為は社会的構築の問題であると仮定することができ，空間内の特定のパターンにそって事物を位置づける社会的諸力もまたそうである。しかし，領域性はさらに密接に社会的文脈に関与している。個人や集団が，他の個人や集団の相互作用に影響を及ぼす試みがなければ，領域性は存在しない。空間内の 2 つの物体の間に特定可能な距離が存在するためには，両者の間にそうした試みなど，あるいは実際相互作

用など全く，存在する必要がない[2]。距離を比較し計測することはできるが，距離が行動に影響を及ぼす潜在能力について，抽象的に語ることはほとんどできない。距離の影響は，道路や鉄道のように，実際の伝達の回路が存在していることに左右され，距離を含んでいるのはそうした伝達の回路である。物理的・社会的に意味のある伝達や相互作用の回路を，物理的な距離に無限定に置き換えてしまうと，距離を非相関的に non-relationally あつかう危険を冒すことになる[3]。

距離とは異なり，領域的な関係は，ある人々や集団が事物に対する差別化されたアクセスを，他の人々や集団に対して主張している社会的文脈（どんなに一般的なものであれ）によって必然的に構成される。この理由から，距離よりも，領域性の効果についてもっと多くのことを抽象的に語ることができる。しかし，依然として，領域性は社会的文脈の産物であるので，領域性について語られることは何であれ，どれほど抽象的であっても，領域性に与えられた規範的な意味をもちうるし，それゆえに社会的文脈に立ち戻っていく。はっきりさせておくが，この規範的意味とは，領域性の利用について人々が下す判断のことである。領域性の効果は，人によって良いこと，あるいは中立的なこと，あるいは悪いことと考えられるかもしれない。台所で子供が皿に触れないようにするために，領域性を利用することは効果的で，むしろ善意の benign 戦略であることに同意する人は多いかもしれない。しかし，子供に対してどの物に触れてならないのかを両親は明らかにする必要がないので，領域性の利用が欺瞞的であると考える人も少しはいるかもしれない。人々が行為，この事例では領域的行為，に対して与える規範的意味とは行為の効果の重要な部分である。親は，領域性が効果的であるとさとるかもしれないが，欺瞞的だと考えてそれを使わないかもしれない。そこで，領域性の理論には，領域性の利用に対して筆者以外の人々が下す倫理的・規範的判断の余地も残しておかなければならない。このことを通して理論が社会と結びつくことができるのである。しかし，理論自体は，ある行為がそれ自体の価値において善か悪かを判断するための手続きを示すことはなかろう。

領域性の傾向を示す際に，それと関わる社会的文脈は背景のかなたに追いやられるし（傾向の意味を明らかにするために特定の事例が用いられるが，それを傾向の文脈を特定するものとして解釈すべきではない），領域性のおおまかな規範的意味が示されるのは，領域性の組み合わせが論じられてからである。実際のところ，いくつかの組み合わせは相互に異なるが，その差異の程度は，筆者以外の人が善意あるいは悪意の意味合いとして分類する用語で表現される。これら規範的な用語は，依然として非常に抽象的で一般的であることが意図されている。しかし，例を示すことによって，ある人々にとって善意ある文脈とは非搾取的な関係を意味すると考えてよい場合もあろう。そうした文脈には，親が子供を交通事故に合わせないために領域性を利用する場合には，個人のレベルで接近できるし，民主的に組織され，コントロールされた工場の労働者が数名のメンバーを任期付監督として選ぶ場合には，集団のレベルで接近できる。一方，悪意ある領域的な関係が生じるのは，領域性を通して差別化されたアクセスが，コントロールされる者を犠牲にして領域性を行使する者を利する場合であると考えられるかもしれない[4]。

領域性の傾向についての記述を中立にし，その組み合わせの規範的意味を一般的なものにしておくことで，領域性の理論に関する表現を，権力と社会に関する特定の理論から分離することができる。このことが，領域性がそれ自身の知的な「空間」を形成することを可能にし，領域性が特定の倫理的理論や権力の理論の虜になることを防ぐ。理論の第二の部分が基づいているのは，領域性の傾向が，規範的意味を持つことができ，したがってこの傾向を採用する特定のタイプの社会的文脈を指摘できる能力である。こうして，領域性の理論を特定の歴史的事例と権力の諸理論に再び結び付けていくことができるのである。

理論：第1部

領域性の 10 の傾向

定義上，領域性は，コントロールの主張として，意識的な行為であるが，領域性を行使する（複数の）者が，そうした効果が存在するための 10 の潜在能力ないし傾向すべてを意識する必要はない。これら

の領域性の傾向は，特定の条件下で現れる。その上，傾向相互は独立していない。事実，以下に列挙される最初の 3 つの傾向―分類，伝達，そして強制―は（経験的にではないが）論理的に他の傾向に優先すると考えることができる。これら 3 つが基礎となって，領域性の残り 7 つの潜在的可能性が相互に関わり，10 の傾向のいずれか，ないしすべてが領域性を利用する理由となりうる。たとえ最初の 3 つが理由として重要でない事例があっても，この 3 つは領域性の定義の一部であるので，必ず存在しなければならない。言い換えれば，領域性は分類，伝達，そして強制を与えねばならないが，10 の傾向の 1 つ，あるいはいくつか，あるいはすべてが領域性利用の「原因となる」ことができる。では *1* 番から *10* 番へと順に見ていくことにし，傾向を記述するための用語が，善意の，中立的な，あるいは悪意の社会的文脈に用いられうることに再度留意しておこう（各傾向には番号がふられ，イタリック体の単語ないし語句が以後の章では傾向の名称として用いられる）。第 2 節が示すように，諸傾向が論理的に相互に結びつく様式は様々である。以下に列挙されるのは，それらの相互関係よりも，傾向の定義の一覧表である。しかし，傾向が議論される順序から，ある傾向がどのように他の傾向につながるかを推察できる。

1. 領域性は特定の環境下で非常に効果的な*分類*の方式を含む。領域性は，少なくとも部分的に，類型よりも区域によって分類する。たとえば，この区域ないし部屋にあるものはすべて私たちのものである，あるいはあなたたちはそれに近づいてはならないと言うとき，事物は，その空間における位置によって，「私たちのもの」あるいは「あなたたちのものでない」といったカテゴリーに分類ないし割り当てられる。その場にある，私たちのものであって，あなたたちのものでない事物の種類を定める必要はない。したがって，領域性は種類による列挙と分類の必要性を，様々な程度で回避している。そして領域性は，私たちがアクセスできる重要な要因や関係の全てを列挙することができない場合に，それらに対するコントロールを主張する唯一の方法かもしれない。この効果は，政治的な分野，つまり政治的であることの部分的意味が，普通ではコントロールできない条件や関係への関わりであるような分野，でとりわけ有効である。

2. 領域性は，たった一種類の目印ないしサイン―境界―しか必要としないので，容易に*伝達*できる。領域的な境界は，空間における指示と，所有や排除についての声明を組み合わせた唯一の象徴的形態かもしれない。道路標識とその他の指示的サインは所有を示していない。伝達手段としての領域性の単純さは，それがしばしば動物によって用いられる重要な理由かもしれない。

3. もし，コントロールされるべき資源や事物の時空間における分布が，遍在と予測不可能な状態の間に問題なく収まっていれば，領域性はコントロールを*強制*するための最も効果的な戦略となりうる。たとえば，動物が食物をあさる行動のモデルが示してきたのは，時空間において食物が十分に豊富で予測可能な場合，領域性が動物にとってより効果的であるが，反対の状況では非領域的な行動がより適しているということである。人間の狩猟採集社会について調査された事例でも同じことが妥当するとされている [5)]。

4. 領域性は権力を具象化する手段を与える。権力や影響力は川，山，道路，家屋のように常に感知できるわけではない。その上，権力とそれに類するものはしばしば潜在的である。領域性は潜在能力を「可視的」にすることによって，それを明示的で現実的なものとする。

5. 「それは土地に関する法律だ」とか「ここではそれをやってはいけない」などという場合のように，領域性は，コントロールする者とされる者との関係から，領域へと関心を転置する displace ために利用することができる。法律や慣習が行動を領域に割り当てるやり方は非常に複雑であるが，十分に社会化された個人には，非常に重要でよく理解されてもいるので，人はしばしばそうした割り当てを当然のことと考える。ゆえに，領域は行為者がコントロールを行うと共に現れる。

6. 種類や類型よりも，少なくとも部分的には区域によって分類することで，領域は関係を非人格的 impersonal にすることを促す。近代都市は，概して，非人格的なコミュニティである。帰属の第一の判断基準はその領域内の居住地である。刑務所と職場はヒエラルキーという文脈の中でこの非人格性を示している。刑務所の看守は囚人がいる一区画の独房に責任を持つ。つまり，監督者としての看守の職務範囲は領域的に定義される。生産ラインにおける職場主任と労働者の関係その他にも同じことが言える。

7. 領域的な諸単位の間にある相互関係と，そこに囲い込まれる活動が非常に複雑になると，そうした活動を領域的にコントロールする理由の全てを見出すことは事実上不可能になるかもしれない。こうした状態が高じると，事物が存在するために場所を作ったり，空間を空にして，維持したりする一般的，中立的，本質的手段として，領域性が現れる。社会は，土地におけ

る財産権の概念を確立することによって, この場所を空にする place-clearing 機能を明示的かつ永続的なものとする。空間に分布する事物をめぐる多様なコントロール（領域を持たない事物が領域内の事物に接近するのを防ぐ行為と，その逆の行為との相互作用）を要約すれば, 事物は存在するために空間を必要とするという見方となる。実際，事物は立地し，区域を占拠するという意味で空間を必要とするが，（空間内の）事物に対する特定の種類の競争が存在する場合に限り，その必要性は領域的なものとなる。ここで生じるのは空間を求めての競争ではなく, むしろ空間内の事物と関係を求めての競争である [6]。

8. 領域性は，事象の空間的特性を生み出す一つの容器ないし型枠として作用する。都市の影響力と権限は，遠く広く拡散するが，「法的には」その政治的境界内に割り当てられている。政治的領域が連邦の補助を受ける単位となる例に見られるように, 領域はそれ以外の属性が割り当てられる対象となる。

9. 囲い込まれるべき事物が存在しない場合，領域は概念的に「空」である。実際，領域性は，社会的に空にできる場所という考えが生み出されることを助長する。都市の空き地の一画をとり上げてみよう。それは空の区画として記述しうるが, そこには草や土があるので物理的には空ではない。そこを空にできるのは，コントロールの対象となっていた社会的ないし経済的に価値のある人工物や事物がないからである。この点で，領域性は概念的に場所を事物から分離し，それから両者を再び組み合わせて, 事物を場所へそして場所を事物へと割り当てる。以下で見るように，この傾向は他の傾向と組み合わせることができ，近代性 modernity の極めて重要な構成要素―空にできる空間という傾向―を形成する。

10. 領域性は更なる領域性の発生を促し，さらなる関係をかたどる。領域よりも事象のほうが多い場合や，事象が領域よりも大きい区域に広がる場合, これらの事象に対して新しい領域が生み出される。逆に，新しい空の領域に対して新しい事象が作り出される必要があるかもしれない。領域性は空間を充填する傾向を持つ。

以上が，領域的組織の利用から生ずると仮定される 10 の結果の簡便な記述である。そして，これらの結果をよりどころにして，非領域的な活動ではなく，領域的な活動が現れる理由が説明される。もう一度述べておくが, これらの傾向は独立しておらず, その正確な数や定義は，これらの傾向が，領域性の潜在的な効果の範囲を包含しているか否かという問題ほど重要ではない。これら傾向の全てが，歴史上の特定の領域的事例において用いられる必要はないし，（既に述べたように）それらの意味や重要性は，誰が誰を，どのように，そして何の目的でコントロールするかという特定の歴史的条件に左右される。傾向間の結びつきのいくつかは既に言及したが，主たる組み合わせを議論していく中で，更なる結びつきが明らかになっていくであろう。

主たる組み合わせ

人間の行動のほとんどは領域的組織のヒエラルキーにともなって発生する。つまり，個人は都市に住み, 都市は州の中にあり, 州は国家の中にある。人々は部屋の中にある机に向かって仕事をし，部屋は建物の中にある。よって，領域についてこれまで言及したことは全て，領域的組織にも当てはまる。たとえば，領域を諸領域のヒエラルキーの中で型枠として用いることは，市町村，州，そして国家の文脈において見られるように，失業率 4 パーセントといった目標を，州や市町村といったレベルよりも，国家といった一つの地理的レベルに正確に割り当てることができることを意味する。職務や責任を，異なった領域的レベルに割り当てることは，一般的な政治的戦略となるかもしれない。知識や責任の範囲を限定する手段としての領域性は，知識と責任を最低で最小の領域には最も少なく，最高で最大の領域には最も多く割り当てる。こういう風に表現していけば，まだ社会的文脈について具体的な話をしていないのに，考えうる傾向の主たる組み合わせと，社会的ヒエラルキー内でのその一般的な重要性を考慮することによって，諸傾向の間の論理的な相互関係についてもっと多くの例を示すことができる。傾向についてやったのと同じように，一覧表からはじめることにしよう。この表は，ヒエラルキーの中で傾向が組み合わせとどう関係するかを示すものとなる。表の順序は，ある組み合わせがどのように他の組み合わせに先行するかを示しているが，組み合わせどうしの相互関係については後で議論される。

図 2.1 は, 基本的な傾向（*1-10*）間の結びつきが，主たる組み合わせ（*a* から *n*）を形成する軌跡をたどったマトリックスである。図 2.1 における組み合わせの配列は，組み合わせの一覧表のようにアルファベット順ではない。なぜなら，図 2.1 がグループ

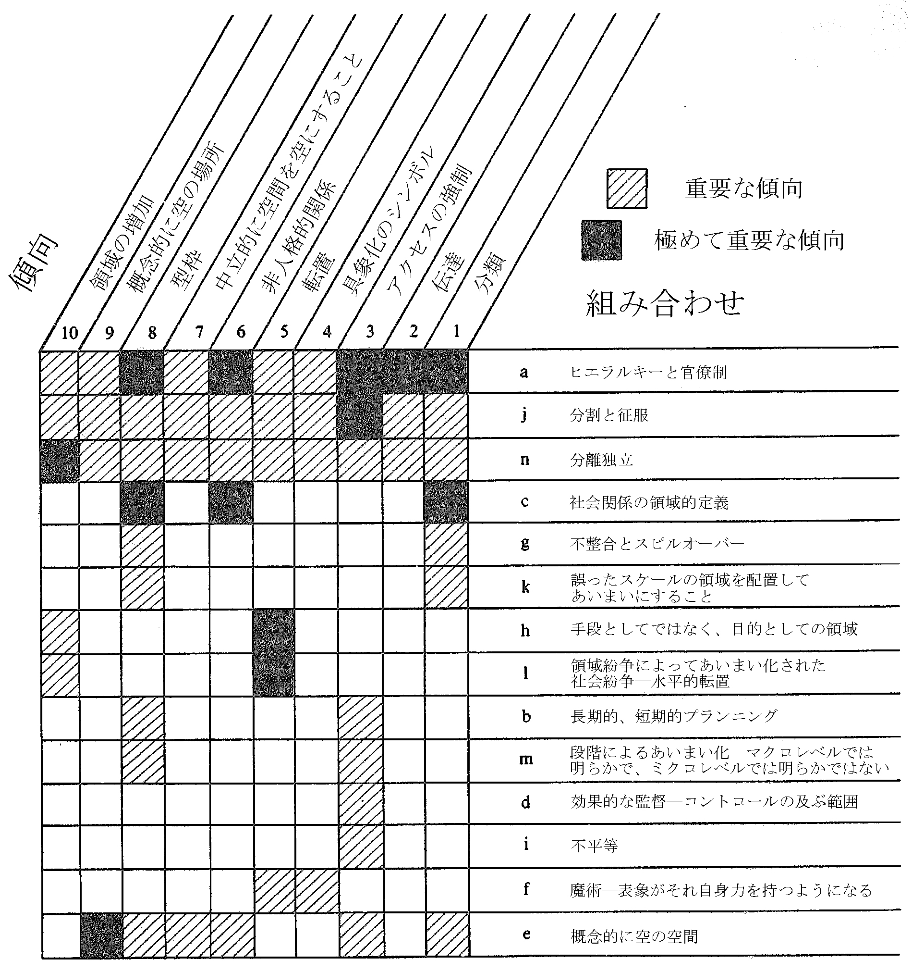

図 2.1 傾向と組み合わせの間での内的連関

化しているのは，傾向を混在させた一覧表で議論される組み合わせであって，組み合わせどうしの相互関係では必ずしもないからである（組み合わせ間のダイナミクスは図 2.2 で例示される)。

図 2.1 は重要な結びつきだけを示している。黒い正方形は潜在能力が極めて重要であることを，斜線の正方形はある程度重要であることを意味している。

空白はその傾向が当該の組み合わせにとって重要でないことを意味しているが，まったく効果がないことを意味しているわけではない。(再び注記しておくが，(*1*)，(*2*)，そして（*3*）は領域性の基本属性でなければならないが，領域性の重要な原因／結果である必要はない。この 3 つがマトリックスに含まれているのは，これらが，領域性の特徴として，どのような場合に領域がもたらす重要な結果にもなるかを示すためである。）領域性を特定の社会的文脈と結びつけることなしに，各傾向がどの程度組み合わせに寄与するか，あるいは黒い正方形の部分を必要および／もしくは十分条件と呼びうるか否かについて，これ以上正確に示すことは不可能である。組み合わせには，そこに含まれる傾向に与えられる意味や重みが異なるだけのものがあることも，忘れてはいけない。

a. 多分最も一般的な組み合わせは，10 の全ての傾向が複雑で厳密な*ヒエラルキー*の重要な構成要素となる場合である。(*1*)，(*2*)，(*3*)，(*6*)，そして（*8*）は特に重要である。というのは，これらの傾向によって，知識と責任の階層的な限定，関係の非人格化，そして

コミュニケーション経路の厳格化が可能となるからである。これらはすべて*官僚制*の本質的な構成要素である。ウェーバーの判断基準によれば，（*8*）[訳注3]の強度，つまり非人格的な関係は官僚制がどの程度近代的であるかに影響する[7]。

b. 領域的なレベルによって段階付けることができるのは*知識*の範囲だけではなく，時空間における*責任*の範囲も，情報へのアクセスを強制して（*3*）かたどる（*8*）ことを通して，段階付けることができる。*長期的プランニング*なら，最大級の知識と責任へのアクセスをもつ最高位レベルの責任となるであろうし，*短期的プランニング*（あるいは全くプランニングがない）なら最下位の領域的レベルの責任となるであろう。さらに，一つの行為を各段階へと下位区分することができる。つまり，最初の段階は政策全体の開始を担わねばならないし，最後の段階は政策細部の実行を扱わねばならない。最初は最高位の領域的レベルに，最後は最下位のレベルに関係する。

c. ヒエラルキーの上位段階は，集団を定義（*1*），強制（*3*），そしてかたどる（*8*）ために領域を用い，その結果構成員は非人格的に（*6*）召集され，扱われるかもしれない。歴史・人類学的文献が*社会関係の領域的定義 territorial definition of social relationships* を議論する際に指摘するのが，このグループ（*1*，*3*，*6* そして *8*）である[8]。これは相対的な概念であり，反対の概念が*領域の社会的定義 social definition of territory* である。両者の違いは程度の問題である。チペワのコミュニティでの構成員資格に対して，20世紀の北米のコミュニティの構成員資格を先に比較したが[訳注4]，これは社会関係の領域的定義の比較的極端な例である。しかし，北米においても領域的および社会的定義の双方が，同じ場所で見られる。アメリカの市町村から警察，法律，消防の保護を受けるための要件は，そのコミュニティの地理的な境界内に居住していることである。そこに住んでもいないで，単に通り過ぎるだけの人もこれらの利益を享受することができる。その一方，同じ都市の中で，誰かの家の客であっても，客は世帯の一員となることはできないし，客に世帯の資源を利用する権利を与えることはできない。アメリカの市町村における完全な政治的市民権は，居住を基礎に与えられるが，依然として合衆国市民に対してのみ与えられるように，実際に領域性が用いられる場合には領域的・社会的両方の要素が含まれる。チペワの例で注記したように，未開発社会が領域の社会的定義にほぼ完全に依存するのに対して，文明社会および特に現代社会は逆を行う。継続的で顕著な領域的定義は，以下で見るように，概念的に空にできる空間（*3*）[訳注5]に結びつく。

d. 重要であるが単純な組み合わせは，知識と責任を階層的かつ領域的に限定すること hierarchical territorial circumscription（*3*）によって非常に効果的な監督の手段を提供できることである。たとえば，囚人を独房に配置してその移動を規制することは，囚人に監獄の中を自由に徘徊させる場合よりも，囚人を監督する仕事を楽にする。実際のところ，独房がなく外壁だけの監獄であっても，囚人に手錠をかけて看守につなぐといった非領域的な接触方法よりも，効果的な監督手段となる。監督効率の程度を示す重要な指標となるのは，*コントロールが及ぶ範囲 the span of control*，すなわち被監督者あたりの監督者の数であろう。この尺度は組織構造を示すよく知られた指標であり，全ての領域的組織によって用いられる[9]。

e. 中立的に空間を空にする機能（*7*）と関連する，社会関係の領域的定義を構成する要素（*1*，*3*，*6*，そして *8*），そしてとりわけ概念的に空になった空間（*9*）からなる組み合わせは，実践的なレベルで，効果的で機能的なコントロールのために，領域的な型枠を継続的に満たし，空にし，そしてその中に事物を再配置する可能性を示す。領域内でのこうした事物の不断の操作は，抽象的なレベルでは，事物と空間の概念的な分離と再結合，すなわち*概念的に空にできる空間*へと至るであろう。空間は―単に（*9*）におけるような場所ではなく―事象にとって効果的で機能的な枠組みとして現れる。この場合，事象と空間は，偶然関わっているだけのように思えるであろう。この可能性が，近代社会においてとりわけ重要であり，近代的な思考様式と最も密接に結びついた領域の概念を特徴付ける。全てのスケールの領域を，繰り返し効果的に「満たし」かつ「空にし」，その領域内で事物を移動させるという発想は，科学，技術，そして資本主義によって，実用性を帯びる。計画立案者は，年毎に州人口が増減することを予想するが，そうした変化を促すのは連邦からの州への補助である。もっと小さいスケールでいうと，工場の建物は領域的な型枠あるいは容器としての働きを持つ。それは，最初は一つの産業を，それから別の産業を収容し，誰も建物を借りないときは，何も含まない。政治的なレベルでの地理的なモビリティと領域的な権力，そして建築的なレベルでの空洞化，充填，配置は，事象とそれが起こる場所との間の結びつきを弱め，事象が生起する背景として領域と空間を提示する。この背景は，抽象的かつ計量的に記述できる。活動が変化することは，とりわけ近代文化において一般的な現象である。消費社会は変化をその本質としている。地理的には，変化と未来は，現在存在するか過去に存在したものとは異なる，空間的形状の組み合わせとして見られる。今までその様相を変えなかった場所は，時間が迂回してきたのであり，そのまま立ち止まってきたのである。変化のために計画し未来のために考えることは，空間の中に異なった事物を想像することを意味する。それは，空間における事物の分離と

再結合を想像することに関わる。空間を空にでき，充填できるよう維持する装置としての働きを，領域性は持つのである[10]。

f. 具象化（*4*）と転置（*5*）は*魔術的*で神秘的な見方につながりうる。領域を通しての具象化は権威を可視化する手段である。領域を通しての転置は，可視的な領域の出現を権力の源泉として人々に捉えさせることを意味する。前者は権力の源泉を際立たせ，後者はそれを偽装する。両者が組み合わされるとき，場所や領域に対する神秘的な見方につながりうる。これは，しばしば空間の宗教的な使用の中で起こる。たとえば，カトリック教が権威を具象化するのは，権力の第一の源泉（すなわち信仰と見えない教会 the Church invisible）とその物理的な発現（すなわち見える教会）とを区別する場合である。しかし，カトリック教は，教会の物理的構造とその聖地が権力を発すると信者に信じさせる場合に，権威を転置する。同じ関係がナショナリズムにも生じる。領土は国家の権威が物理的に発現したものであるが，領土やホームランドへの忠誠によって，領域は権威の源泉のように見える[11]。

g. 複雑な組織の領域的要素は，それ自身の推進力を持ちうるのであり，一方でヒエラルキーと官僚制への必要性を増し，他方で組織の効率を低下させる。こうしたことが生じるのは，区域による定義（*1*）が（故意にではなく）誤った区域やスケールを画定し，それゆえに領域の*不整合 mismatch* あるいは過程の*スピルオーバー*に至る場合である。この不整合は領域を型枠（*8*）として用いることによって増すかもしれない。不整合とスピルオーバーがあれば組織の効率は低下する。しかし，組織内の知識と責任は不均等に分担されているので，問題を是正する責任は現存するヒエラルキーに分与され，それゆえに官僚制の役割を強固にし，高めさえするかもしれない。

h. 転置（*5*）と領域的操作（*10*）によって，領域がコントロールの*手段よりもむしろ目的*のように*見える*ことがより容易となる（「見える」が強調されているのは，領域性が，戦略として，常に目的に対する手段であるからである）。カトリック教会はこうした例を提供する。紀元 5 世紀までに，大司教の権力は，彼らの管理下にある司教管区と教区の数によって，部分的に測られていた。この権力を増すために，大司教はその管区を細分化し，監督下にある司教と司祭の数を増やしたのである。

i. 領域的要素は*不均等をつくりだす*それ自身の*推進力*を持ちうる。そうした要素には，事物に対するアクセスの差別化を強制すること（*3*）を促す働きがあるが，それは，地位，特権，そして階級へと制度化されうる。

j.（*a*）において論じられた，効果的な組織と官僚制に貢献する傾向群は，*分割し征服する*，そして組織をその各部分の調整のために一層強固にして不可欠なものとする，一般的手段として用いられる場合がある。この時，傾向群はその重要性を変化させる。職場の文脈において，これら 10 の傾向は，労働力を「非熟練化」し，工場の規律を生み出すために用いることができる[12]。

k. 分類（*1*）と型枠（*8*）は，とりわけ，（故意にではなく）領域と事象との*不整合をあいまいにする*ために用いられる。これは，特定の領域に特定の役割を割り当てることが，実際には誤ったスケールで行われているのに，適切に行われていると人々に信じさせることによって可能となる。この種の例は，実際には特定の汚染物質の発生源が地方にないのに，汚染削減対策に財政投入する主たる責任を地方レベルの政府に課すような場合である。

l. 転置（*5*）と領域の増加（*10*）を用いれば，社会的対立の原因から注意をそらせ，領域それ自体の間の紛争に向けることができる。こうした例は，対立をもたらす社会経済的関係よりも，都市の危機つまりインナーシティと郊外の間の対立，そしてスノーベルトとサンベルトの間の対立に関心が向けられる場合に見ることができる。

m. 様々なスケールで行為を地理的にかたどること molding（*8*）は，長期的および短期的な計画策定の責任を対応するヒエラルキーのレベルに強制すること（*3*）と組み合わされて，*事象の地理的インパクトをあいまいにする*機会を組織に与える。こうしたことは，あるスケールでの行為の地理的範囲を，たとえば国家スケールであって，そのほかでないと，正確に特定することによって生じるし，一つの決定を複数の部分に分けることによっても生じる。その結果（不可逆的かもしれない）一つの行為の開始が最も大きな領域の文脈で考慮され，その行為の実現が後にそれより小さい領域に委ねられる[13]。この二つの組み合わせは原子力に関する合衆国の政策の歴史に見出される。合衆国の電力の主要な部分が原子力によって発電されることは国家のレベルで決定された。この目標は国家全体に関わるものであり，発電所を立地させる決定が地方レベルでなされる前に，そして廃棄物を処理する決定が熟慮される前に，決定済みであった。

n. 階層的な組織的コントロールの効果を向上させる傾向群（*1*，*2*，*3*，*6*，そして *8*，あるいは *a* と *j*）は，逆効果，つまりコントロールの低下や*分離独立 secession* さえもたらす可能性がある。分割，征服，非熟練化，そして関係の非人格化は，これらの傾向がもつ組織解体，疎外，そして敵対を生み出す可能性によって，無効化されるか相殺されるかもしれない。過去多くのケースで，工場の組み立てラインでは，行き過ぎた労働の領域的限定と非熟練化が進んでいた。労働者は無意味な作業課題や疎外に対して様々な形で抵抗してきたし，近年経営者側は，ヒエラルキーの比

較的低いレベルで労働者の領域的制約を減らす新しい組織づくりを模索している[14)]。さらに，領域的限定に抵抗する人々は，囚人が文字通り独房と独房区を所有下におく場合や，政治的な単位が分離独立する場合のように，様々なやり方で現存する領域を活用することができる。分離独立する単位が領域的形態をとるケースでは，領域を採用する理由は10の傾向とそれらの組み合わせに由来していると仮定できる。

さて，これらの可能性は孤立も独立もしていない。組み合わせに関する先ほどの記述と並んで，図 2.1 のマトリックスが明らかにしているのは，組み合わせのいくつかが，他の組み合わせと全く同じ傾向群を用いるが，それら傾向に割り当てられる重みと，傾向の暗示的および規範的意味を強調する程度が異なっていることである。たとえば，ヒエラルキーと官僚制（*a*），分割と征服（*j*），そして分離独立（*n*）は，同じ傾向群（*1*, *2*, *3*, *6*, そして *8*）に大きく依存しているが，個々の傾向の重要性は異なっている。ヒエラルキーと官僚制（*a*）は領域を利用する善意，もしくは中立の組織と考えることができる。分割と征服（*j*）は傾向群（*1*, *2*, *3*, *6*, そして *8*）の否定的な側面を強調し，何が悪意ある組織と考えられるかを描いている。分離独立（*n*）は，個人ないし集団が他者の権威を弱めたり，除去したりするために領域的傾向群（*1*, *2*, *3*, *6*, そして *8*）を利用する場合の条件を記している。同様に，誤ったスケールの領域をあてがうことによるあいまい化（*k*）は，不整合とスピルオーバー（*g*）における悪意ある側面である。領域的対立によってあいまいにされた社会的対立は，同じ傾向に対して目的としての領域性（*h*）とは異なった点を強調する。（時間とスケールという点で）段階的なあいまい化（*m*）は長期・短期的プランニング（*b*）の否定的な側面であり，不均衡（*l*）は効果的な監督，つまりコントロールの範囲（*d*）の否定的な側面である。

10の主要な傾向と共に，これら14の組み合わせは，本書の定義につながる潜在的な領域性の理由／原因，結末／結果である。本書の残りの部分では，これら組み合わせを用いて，歴史的重要性を失わない程度に正確かつ一般的なレベルで，どのような領域性の潜在的利点があるのかを特定していく。ここまで，分割と征服などいくつかの組み合わせを除けば，傾向と組み合わせのほとんどは，まだ領域性との関連で論じられていない。それらは身近な領域的効果がどのように作用するのかを理解するうえで必要な要素なので，言及しないのは不幸なことである。領域性によって 10 の傾向が複合的に採用されることが可能となったり，微妙に異なった力点を置いてこれら 10 の傾向を活用することで組織が階層的かつ官僚的になることが促されたり，分割と征服を助長するより組織的不効率を生み出すことが促進されたりすることを知れば，分割と征服における領域性の役割をよりよく理解することができる。

組み合わせの中には，あいまい化をもたらす全ての組み合わせ（*k*, *l*, そして *m*）を一緒にできるように，より一般的なカテゴリーに組み替えられるものがある。マルクス主義の理論によれば，これらの組み合わせは，後ほど見るように，資本主義下の近代性を構成する重要な要素を実際に形成しているし，さらに細分化することさえできる。スピルオーバーによる不整合（*g*）が，外部性という狭義の経済的概念で置き換えられる場合や，分割と征服（*j*）が，アフリカにおける 19 世紀イギリスの植民地政策という狭義の事例で置き換えられる場合のように，組み合わせの意味を狭めることは確かに可能である。しかし，こうした狭義化は一般的に過ぎるか，具体的に過ぎるか，いずれかの危険を伴う。ここでも，定義とその意味の限定が適切なレベルであるかは，抽象的には証明し得ない。理論の効用を例示するためには，領域性の事例研究を進めなければならない。

どの潜在的可能性が相互に関係し，そうした相互関係がどのように現れるかは，理論の内部のダイナミクスと構造を反映している。図 2.1 は多少なりとも可能性のある相互関係について，つまり潜在的可能性がどのように他の可能性を強化したり，打ち消したりするかについて，いくつかの示唆を与えてくれる。全体的には，領域性はある程度まで組織（国家であれ，企業であれ，教会であれ）の効率性を高めることに貢献し，組織の目標を善意から悪意へと変えることにも寄与する。たとえば，責任を領域的に定義することは効率的であるが，領域的定義の代用によって，コントロールされているものが何なのかわからなくなると，意図しないスピルオーバーや不整合を生み出しかねない。これらの不効率によって，スピルオーバーと不整合を調整するために，更

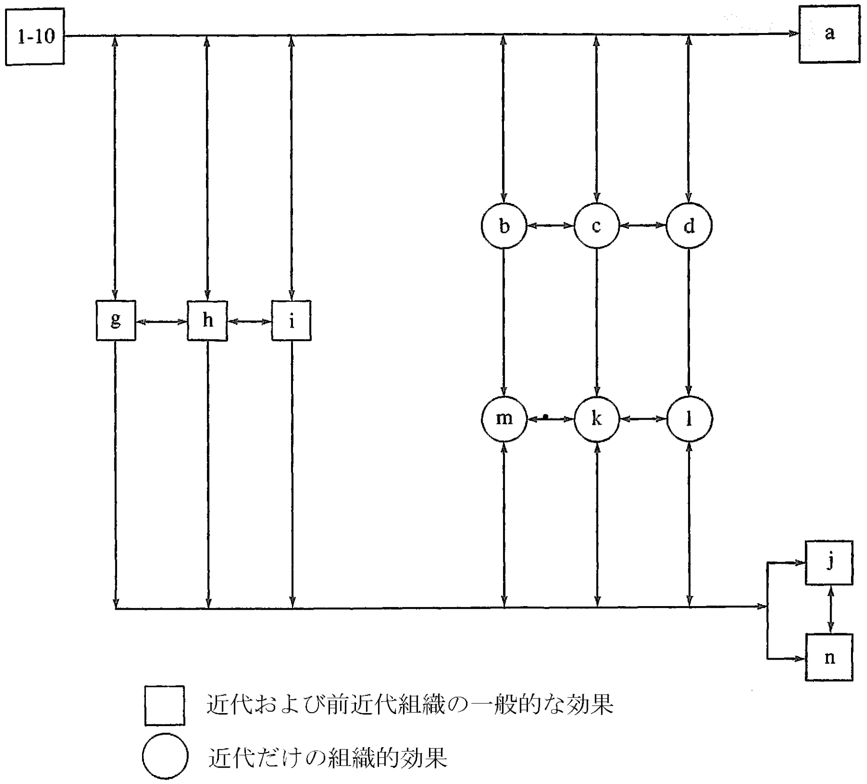

図 2.2　組み合わせの流れ、ループ、そして転換点

なるヒエラルキーとより大きな領域が必要となることがある。しかし，最終的に，中央からのコントロールは損なわれるであろう。その結果，*形式上*ではないにしても，*事実上*地方のレベルがより大きな自治権を持つようになるかもしれない。区域によって責任を定義すれば，意図的に進行中の過程をあいまいにし，偽装することや，コントロールする側を有利にすることができるし，組織を善意あるものから悪意あるものへと変えることも可能である。

これらの示唆のいくつかは図 2.2 に例示されている。このダイアグラムの前提（「a」への直線経路によって例示されている）は，組織のもともとの目標は善意，もしくは中立であり，組織はその階層的コントロールを向上させるために，領域性の諸傾向に依拠する，ということである。しかし，上で示唆した過程内部のループと転換点のいくつかは，定常化し，組織効率を下げるかもしれない。このことによって，地方の自治権が増大し，組織が分裂さえしうるし，中立を離れて，コントロールされる人々を分割し征服するという，悪意ある状態へと組織が進むかもしれない。図中の円は，とりわけ近代社会で一般化した，ループを示している。

これらのケースは，潜在可能性の間の相互関係から発生する，多くの可能性のほんの数例にすぎない。それらを更に追求していくために，領域性の理論では，領域性の特定の潜在可能性を採用する社会的文脈のタイプを，さらに明らかにせねばならない。実際のところ，これまでの議論は，社会的文脈を決して無視してきたわけではない。非常に一般的な程度で，社会的文脈は領域性の定義そのものに織り込まれている。社会的文脈は，傾向の議論ではずっと後景に退いていたし，組み合わせの議論では，それほどでもなかったが，背景に押しやられていたに過ぎない。領域性の論理にのっとって，この議論を更に先に進めることができるが，領域性を利用すると期待される社会的文脈のもっと明らかなタイプと結び

つけないと，それはできない。理論の内部構造の多くの部分を埋めていくために，社会的文脈をここで前面に押し出さなければならない。それは，原子の構造が意味をなすためには，元素の周期表が利用可能でないといけないのと，ちょうど同じである。

理論：第 2 部

結合：歴史と理論

社会科学は社会の数多あるタイプと様式に精通している。議論を絞るために，ウェーバーとマルクスによる社会モデルに着目しよう。これらのモデルは，その影響の甚大さに加え，広範な社会組織を提示し，領域的構造と密接な関係を有する。ただし，これらは，領域性の理論を組み合わせることのできる，唯一のモデルでは決してない。

ウェーバー　とりわけウェーバーの研究における 2 つの様相は，われわれの議論と関係する。第一の様相は組織の内部ダイナミクス，とりわけ官僚制のそれを考察しているが，第二の様相は，特定の組織が多かれ少なかれ発生しうる歴史社会的な文脈を提示している。

まず，第二の様相を考えるが，ウェーバーが三つの一般的ないし理念的なタイプの組織，つまりカリスマ的，伝統的，そして官僚的組織に言及していることに留意しておきたい。最初の組織は，必ずしも何らかの時期や社会のタイプには結びついていない[15]。組織の追随者と先導者は緩やかな組織を形成する。職員，手続きの規則，そして明らかなヒエラルキーが存在したとしても，ごくわずかしかない。しかし，集団が存続するにつれ，とりわけ後継の問題が生じると，カリスマは「慣例化」される。カリスマ的組織は二つのさらに形式化されたタイプの組織，伝統的あるいは官僚的組織，のいずれかに推移する。

その名が意味しているように，伝統的組織は，社会階級と複雑な分業を含む前近代の社会ないし文明に，主として見出される。こうした組織は，行為や問題解決について伝統的な様式に依存している。リーダーシップは特定の閥族，家系，交友の範囲に依存する場合が多い。権威の正当化は慣習に基づいている。ヒエラルキーは非常によく発達し，複雑であるが，個人の能力と人格によって，その地位の権限 power と管轄範囲が変わるかもしれない。権威の正当性は役職 office それ自体を保持することではなく，リーダーシップに関わる伝統的地位との結び付きに依存している。伝統的組織は，前近代文明全体を通して発生しており，カリスマが慣例化されたときに組織としての特徴を持つ。多くの学者がそうした伝統的ヒエラルキーを官僚制と呼んできたが[16]，ウェーバーがこの用語を用いる場合，それはとりわけ，資本主義的および社会主義的経済を含む近代社会に，主として見られる組織的特徴を示している。ここでは，そうした全ての組織を官僚的と呼ぶ慣習に従うが，ウェーバーが記したような近代的特徴が，組織に含まれる程度を示していく。ウェーバーによれば，近代社会におけるカリスマの慣例化は通常官僚的組織に結びついてきた。ウェーバーの用語における官僚制は，形式化されたコミュニケーションの経路，明確なヒエラルキーと権威の定義，そして非人格的な関係によって特徴づけられる。これらが階層的な組織を近代化するのである。

もっと特定すれば，ウェーバーは以下のように主張している。

> 1）近代官僚制の個々の役職保有者は，個人的には自由であり，その非人格的な公式の義務という点においてのみ権威に服従する。2）官僚制自体は明確に定義された役職のヒエラルキーに沿って組織されている。3）各役職は法的な意味において明確に定義された職能の範囲を持っている。4）役職は自由な契約的関係によって補充される。5）役職の候補者は技術的な資格能力をもとに・・・（しばしば）試験もしくは技術的訓練を証明する修了証書，あるいはその両方によって選定される。候補者は任命されるのであって，選出されるのではない。6）官僚は金銭による固定給で報酬を受ける。・・・給与は主としてヒエラルキーのランクに応じて段階づけられる・・・。7）役職は現職にある者が唯一もしくは少なくとも最初に占有する職位である。8）それは経歴となる。年功序列もしくは業績，あるいはその両方に応じた「昇進」のシステムがある。昇進は上司の判断に左右される。9）公務は業務追行手段の所有から完全に分離されている。10）官僚は役職にかかわる行為において厳格で体系的な規律とコントロールに服従する[17]。

逆に言えば，近代的ではない階層的（官僚的）組織は以下の特徴を欠く傾向がある。a）非人格的な規則に服従する明確に定義された職能の範囲，b）上下関係の合理的な秩序づけ，c）自由契約ないし技術的訓練にもとづいた任用と昇進の規則的システム，そして d）固定給。非人格性がこの一覧の主たる底流であることには注意すべきである。非人格性の度合いが高まるほど，官僚制はますます近代的になる。

組織構造に関する近年の多くの研究が，ウェーバーの諸要素を整理・拡張しており，要素間の相互関係について具体的な示唆を含んでいる。研究の対象は，大部分が *20* 世紀の西洋産業組織であるが，変数のいくつかとその仮定された相互関係は，前近代的組織を分析するための指針として用いることができる。

これら近年の研究は，ウェーバーの研究のように，近代的な組織と官僚的構造の内部にある非人格性と不偏性 impartiality を指摘しており，また以下の点を組織の重要な様相として示唆している。

専門化—分業を指す。
標準化—組織内の手続きの規則性の程度を指す。
形式化—仕事の定義とコミュニケーションのために文書を使用することを指す。
集権化—組織内の権威の位置を指す。
形状 configuration—権威とヒエラルキーの形を指し，しばしばコントロールの範囲によって要約される。

これらはもちろん非常に一般的な特徴である。細部の意味は研究によってかなり異なっているが，専門化，標準化，そして形式化が相互に強く関係しており，組織の階層的構造と技術にも結びついているという点では合意がある[18]。

先に記したように，ウェーバー以外の研究者は，官僚制という用語を，伝統的組織のヒエラルキーを記述するためにもっと一般的に用い，非人格的関係のように，伝統的組織に近代的官僚制の様相のいくつかの例を見出してきた。この点を除くと，ウェーバーの定式化に見られる，歴史的文脈についての様相には，これまでほとんど修正が施されてこなかった。むしろ，修正のほとんどは，ウェーバーの定式化の第一の様相，つまり近代的組織と官僚制の中で生起する諸過程の記述に対してなされてきた。そして，ここでは 2 つの研究の道程が領域性と関わっている。

第一に，すぐ上で記したように，組織構造についての最近の研究は，標準化，形式化，集権化，そして形状といった様相を導入し，ウェーバーのモデルの要素を整理した。第二に，組織についての研究は，官僚制の規範的意味をはっきりと示すようになった。ウェーバーは，官僚的形態を，潜在的には最も合理的で効率的なものとみなしていた。関係を過度に均質化し非人格化する傾向が，組織を解体したり，分裂させたりすることや，カリスマ的な指導者が新しい組織を形成する機会が創出されるといった，官僚制の否定的な特徴のいくつかも彼は認識していた。しかし，彼が最も感銘を受けていたのは，合理性と効率性という官僚制の肯定的な潜在能力であった。全体的に，彼は，善をなす潜在能力をもった道具として官僚制を提示したのである。

官僚制の否定的側面をさらに包括的に検討し，詳述したのは，ウェーバーの後継者，とりわけミヘルズとマートンであった。ミヘルズがドイツの社会主義組織を検討して見出したことは，その理想主義的で平等主義的な起源にもかかわらず，こうした組織は制度化，権威主義化，階層的厳格化を深め，職員が組織の本来の目標に従事するよりも，自らと役職の永続化に関心を示すようになるということであった[19]。彼はこうした傾向を官僚制一般に起因するものと考え，「寡頭制の鉄則」と呼んだ。マートンは官僚制のもう一つの悪意ある側面を明らかにした。厳格な形式的手続き，規律，そして規則を強調することによって，職員は，形式的手続きに固執すること自体が目的である，という見方を持つようになる[20]。これをマートンは「転置」と呼んだ。

官僚制の問題点に関して引用できるその他の研究は多い。こうした研究が全体として重要であるのは，ウェーバーの特性描写は誤りではないが，官僚制の内部ダイナミクスにはそれ以上のものがあり，官僚制を効率性と善意や中立の効果から離間させるからである。では，もし組織が動態的で，近代社会はウェーバーが官僚制と呼ぶ特定の性格を持つ複雑な階層的組織を持ち，伝統的社会は，近代的官僚制の特徴をほとんど持たない，複雑であるが伝統的なヒエラルキーを持つとすれば，これはどのようにして領域性と結びつくのだろうか。

動態的組織と領域性が結びつくのは，組織ダイナミクスの多くが領域性の論理に反映され，伝統的および近代的組織が，その構造の統合的部分として，領域性を採用してきたからである。領域性を用いて組織の近代的様相に関する研究に着手すれば，以下の結果を得ることになるだろう。非常に一般的な意味で，領域性の理論が示唆するのは，伝統的，近代的社会の双方において，領域性は組織的効率性，集権化，およびコントロールの範囲を，ここでもある点までであるが，増進させることである。また，図2.2 に示されているように，転換点に到達すれば，領域性は組織を弱体化しうることを，理論は想定している。領域的ユニットは別の組織がそこから分離したり，それに取り込まれたりする。領域的ユニットが官僚制の不効率を生み出し，ユニット自体が目的化される場合，組織弱体化のプロセスはとらえがたいかもしれない。特に官僚制の近代的様相に注目するならば，近代社会において，ただし（本書のカトリック教会に関する議論で示されるように）ある程度前近代社会においても，分類，伝達，そしてコントロールを容易にする領域性の活用によって，ある点まで専門化，標準化，そして形式化を高めることが可能である。「ある点まで」という表現は，ここでも強調されなければならない。というのは，こうした組織が発生する社会は，領域的効果の諸関係の具体的内容と密接に関わり，領域性の理論の内的ダイナミクスに示された重要な転換点が，ここでも最終的に効果のいくつかを妨げる方向に向かうかもしれないからである。これらの転換点がもたらす領域的効果は，官僚制がもたらす保守的で寡占的な効果に相当する。

領域性を利用する組織のタイプがもっと明確に定義されると，理論の内的論理を洗練し，さらに一層具体的な関係を確認することができる。第6章で見るように，軍隊，学校，そして工場といった，近代的な集権化された官僚的組織では，領域性の度合いは様々ながら, コントロールの範囲, ヒエラルキー，仕事の複雑さ，そして技術が，特定可能な量的関係として把握できる。

領域性と，複雑で階層的な社会分業との関係の多くは，ほとんどあらゆる組織に，様々な程度で存在しうるが，近代社会ゆえに卓越する関係があるという事実を見失うべきではない。このことは，組織内での領域性利用の多くが，その組織が発生する社会に依存していることを意味する。帝国と近代国家の政府が，その領土を領域的に細分化してきたのは，領域性によって利点を引き出すことができるからである。しかし，ちょうど伝統的組織と近代的官僚制との間に違いがあるように，これらの組織が採用する領域性の効果にも違いがある。この種の組織が持つダイナミクスを，領域性の潜在的なダイナミクスと比較することによって，それぞれの組織に関わる条件を特定することができる。たとえば，伝統的組織が，近代的官僚制とは異なり，非人格的な関係を作り出し，概念的に空間を空にするという領域性の効果を強調するとは考えられない。

それでも，こうした近代的な効果のいくつかを含む前近代的組織について，興味深く重要な事例が存在する。後に見るように，カトリック教会はそうした事例の一つであるが，官僚を選考する中国の科挙制度と，王法廷 King's Court というイギリス封建時代の制度もそうである。これらの制度は，諸関係を非人格的に維持していくための領域的仕組みを保有していた。そうした仕組みの一つは，職員を領域間で定期的に異動させること，あるいは最低でも職員を出身地に配置しないことであった。

マルクス　領域性と多様に結びつく二番目の主要な社会理論は，マルクス主義である。マルクスは，官僚的ダイナミクスが独立した現象たりうる可能性を検討しなかった。むしろ, 彼の著作は, 官僚制を，階級権力によって操作される制度として論じている。なぜなら，マルクスは，位階，専門化，そして役割として顕在化するような社会的分業は，経済的分業によって決定されると説いていたからである。官僚制の変転は，経済諸階級とその相互関係の展開と結び付けられる。いったん共産主義が階級対立を取り除けば，抑圧の主体としての国家は消滅する。マルクスは，官僚制も国家とともに消失するか，という問題を直接的には提示していなかったが，ヘーゲルに対する初期の批評では，社会主義が国家の官僚制化を単純化すると見なしている[21]。近年マルクス主義者は，官僚制が，共産主義のユートピア的世界ではそうでないにしても，社会主義諸国では侮りがた

い一つの力学であることを認めている。ソ連の官僚制が，それ自身の内的ダイナミクスと矛盾を抱えている。たとえば，政府官僚制の寡頭制的傾向は，階級構造と階級利害に相当するものを作り出しうるのであり，それらの形態，重要性，そしてダイナミクスは，それぞれの社会歴史的文脈に影響される[22]。そして，この種の研究を通して，官僚制内のダイナミクスの方向性と重要性に，さらなる具体的内容を与えていくことができる。

本章の目的にさらに直接に関わることとして，資本主義における階級対立に関するマルクスの理論は，領域性に適用される場合，*あいまい化に関わる* ***obfuscatory*** 領域性の組み合わせ（*k*，*l*，そして *m*）を，資本主義の後期段階における最も重要なものと識別している[23]。あいまい化の組み合わせの発生が期待されるのは，資本主義には階級対立を偽装する一般的傾向があるからであり，国家が労働と資本に対して特異な位置にあって，それが国家の理論ととりわけ重要な関係を持つからである。一方で，国家は資本主義を維持しようとし，他方で，民衆の擁護者にして公共財供給の牽引車であると主張して，階級対立を封じ込め，減らそうとする。この二重の役割が意味するのは，権力の源泉と形態はしばしば偽装されなければならず，領域性のもつあいまい化の傾向はこれを助長しうる，ということである。領域的あいまい化は国家や地方国家のレベルにのみ適用される必要はない。職場，学校，そして消費の領域にもそれは現れる。

さらに，マルクス主義の理論は，近代性に関する一般的理論と関連して，現在そして近い過去を，*空にできる空間（e）*が最も顕著かつ頻繁に発生すると期待できる時代とみなしている。これは，資本主義が，空間を，事象の立地と配置の枠組みとする見方を強化するからである。資本主義は，場所を商品へと変えることを促す。資本主義によって，地球の表面を，事象が偶然かつ一時的に立地する空間的枠組み，とみなすことが可能になる。資本の蓄積と成長を必要とする資本主義は，変化を至上のものとする。そして，地理的には，変化とは，事物と空間との関係が流動的であることを意味する。未来は，地理的関係の飽くことのない変化と考えられ，未来の行為はそうした変化を作り出すのである。そこで，領域性は，空間を満たし，同時に空間を空であると定義し，そのように維持していくための型枠となるのである。

マルクス主義者と同じく，ウェーバー主義者が指摘するのも，前近代的な諸文明が領域性利用の点で異なっていたとしても，諸文明間での利用の違いは，いくつかの点で，近代社会での利用との違いほどには大きくない，ということである。ウェーバー主義者は，ほかにこれと匹敵する，領域的使用に認められる唯一の歴史的分岐点が，原始社会と文明との間の過渡期に生じたということ，にも合意するであろう。マルクス，そしてとりわけエンゲルスは，原始的社会を，その他の資本主義以前の様式と本質的に異なったものとして特徴付けている[24]。彼らにとって，原始的社会とは，抑圧的制度が，あったとしても，ほとんどない小規模の平等主義的社会を意味している。領域性の原始的利用は，資本主義以前の社会であれ，資本主義社会であれ，諸文明の中に見られるものとは非常に異なっていた。例えば，原始社会では，非人格的関係を形成し（*6*），型枠となり（*8*），概念的に場所を空にし（*9*），あるいは領域を増やす（*10*）ための，頻繁ないし顕著な領域性利用を見出すことは期待できまい。そして，組み合わせのほとんど，特に社会関係の領域的定義（*c*），を見出すことはなかろう。

領域性の理論と，権力と組織に関するマルクス主義的，ウェーバー主義的，あるいはその他の理論との間の結びつきについて，語りうることはもっとある。さらなる固有の結びつきは後ほど本書で論じられるであろうし，具体的な歴史的事例の中で検討されるであろう。後続の章の中で近代性を議論する際，ウェーバー主義者とマルクス主義者に加えて，新スミス主義者と新ケインズ主義者による領域性の解釈について考察する。この程度の描写でも，領域性の歴史について注目すべき分野を示すには十分である。

図 2.3 は，既に言及したように，領域性の利用と，それに結びつく，とりわけマルクス，ウェーバー，そして歴史の一般的理解によって示唆される，社会歴史的な文脈との主要な関係を要約している。この図が強調しているのは，領域性と，政治経済における変化との広範な結びつきである。よって，経済的分業が，誰が誰を何の目的でコントロールするかを

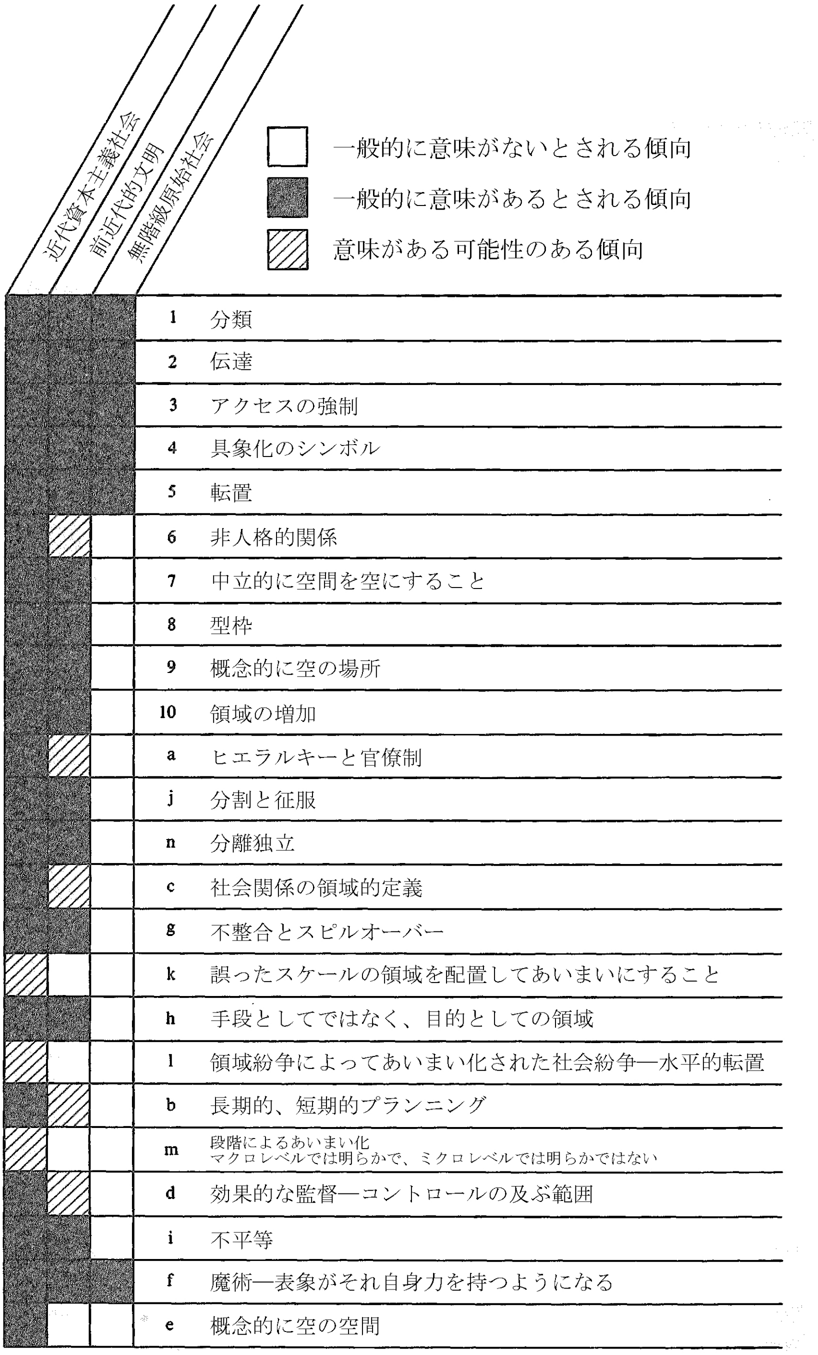

図 2.3　歴史的連関

決定する第一の要因である，という考えから描かれている。もちろん，このことは，非経済的な要因とともにその他の経済的要因に領域性が影響されない，ということを意味しない―実際，図 2.2 は，いかにして階層的組織が領域性に対するそうした影響の一つになるかを示している。むしろ，図 2.3 が提起しているのは，最も一般的な領域的変化は，政治経済における変化と関連しうるということである。この

図に示されている二つの重要な歴史的時代は文明の誕生と, 資本主義と近代性の誕生である。（資本主義と近代性は同意ではないが―後者は経済的用語に還元できない文化的，イデオロギー的構成要素を含んでいる―資本主義は歴史的に非常に重要な近代主義の要素であり，簡潔に説明するために，この二つの用語は時に交互に用いられる。ソ連のようないわゆる「社会主義」国も近代的であるが，それらの政治経済的形態についての合意がほとんどないので，そうした国での領域性の利用を単独では議論しない。）

文明の誕生において，領域性に関する最も重要な新しい効果は，他者を統治し，社会関係を定義し，そして集団を分割，征服，組織する際に領域性を利用することである。資本主義の誕生にともなう，領域性の最も重要な新しい効果は，領域性を用いて，概念的に空間を空にし，近代的官僚制を作り出し，権力の源泉をあいまいにすることである。これらは歴史的組織と領域的機能との間の最も重要な結びつきの描写であり，図 2.2 に加え図 1.2 [訳注6)]にこめられた一般的な示唆とともに，本書の残りの部分に対する組織モデルとして活用できる。

図 2.3 は過去に関する認識を要約しているが，全ての歴史記述がそうであるように，おそらくは実際に過去に起こったことに反しているであろう。後続する章では，歴史的記録（マルクスとウェーバー以外の論者が過去について論じたことを含む）が，これら仮説化された関係を実証する傾向があることを示す。「傾向がある」という用語を用いる理由はいくつかある。考察されるべき時間と空間の範囲は膨大である。歴史上顕著な出来事のみを描写することはできるが，慎重に事例を選定し，大量の二次的資料をサンプリングしなければいけない。歴史的解釈は絶えず変化している。特定の時代に対する別の見方はたくさんあり，その時代の重要性と長さに関する論争も数多い。資本主義とは何か，それはいつ重要となったかという問題はほとんど解決されていない。その他の時代や社会組織についても同様である。マルクスとウェーバーが提供したのは一般的モデルであるが（そしてモデル，とりわけ社会的なモデル，は現実の部分的で近似的な表現にすぎない），もっと詳細な歴史的研究が多く存在し，これらは，彼らの一般的な社会類型を受け入れる傾向がある。これら詳細な研究から得られる証拠は次章で用いられ，図 2.3 で示唆される関係を肉付けし，そして特に，原始社会から文明社会への，そして資本主義以前の社会から資本主義社会への，二つの過渡期全般を強調するであろう。これらの過渡期は，空間と時間の概念と利用における変化との関連からも記述される。よって，第 3 章は「領域性，空間，そして時間」の歴史を概観する。

図 2.3 は，社会 - 領域的な関係の背後にある，経済的諸力を強調している。しかし，それは以下のことも示唆している。事物を区域によって定義し，アクセスを強制する，といったいくつかの領域的効果は，あらゆる社会で起こりうる。しかし，関係を非人格的にし，コントロールの範囲を拡大するために領域性を利用する，といったその他の効果は，全ての文明で見られつつも，前近代的文明よりも近代的文明で一層顕著に見られる。換言すれば，近代的特徴をもつ制度は，前近代的社会にも存在しうるし，その逆もまた言えるのである。さらに，図 2.3 に記されていないが，図 2.1 の一般的マトリックスに含意され，図 2.2 で例示されているのは，人々と領域との関係は，その関係が生じる社会は変化していないのに，重要な変化を経る場合があるということである。ある社会の政治経済構造が（少なくとも図 2.3 で描写された一般化のレベルで）変化していなくとも，図 2.2 が例示しているような，人々の間での，そして組織の中での領域的効果はそれ自身のダイナミクスを持つかもしれない。第 4 章は，教会について，教会組織の内部にある領域的ダイナミクスと，その政治経済的変化との関係を検討することによって，これらの可能性を探求する。

教会は，領域性を組織の統合的部分として利用した機関で，最も長く存続し，最も多くの記録が残っている例の一つである。教会区，教区，大司教区，そして教会堂の建築的内部区分も，教会が領域性に依拠していることを明らかにしている。教会組織のこうした側面は，三つの主要な歴史時代，つまり古典時代，封建時代，そして近代の間に，異なった発展を遂げた。しかし，近代において，教会の内部ダイナミクスは，近代化にともなう外的な政治経済的変化の多くに抵抗したように思える。ローマおよび

封建時代には，教会の領域的効果は，その時代のほかの機関の場合よりもはるかに近代的であったが，中世の終わりまでには，同じ効果が教会を社会から分離し，社会的変化から孤立させる方向に作用した。その結果，宗教改革以来，教会は近代的組織よりも古代の組織の例として捉えられている。こうした変化と永続性，内的ダイナミクスと変化への抵抗の組み合わせによって，教会は，前近代の時代から現在に至る，ヒエラルキー，官僚制，そして領域性の間の相互関係に関する，重要な事例研究となる。

第5章「アメリカの領域的システム」は16世紀から現在に至る北米の政治的形成を用いて，近代的な領域性利用のテーマ，特に空にできる空間という概念の創出，官僚制の促進，そして権力の源泉のあいまい化における，領域性の役割に再び焦点を据える。第6章「職場」は，こうした同じ近代的な領域の利用が，過去300年間に，地方および建築のレベルでどのように発展してきたかに着目する。

訳注

1）Robert David Sack, *Human territoriality: Its theory and history* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986) 第1章において，領域性は「地理的区域を画定し，そこへのコントロールを主張することによって，人々，諸現象，諸関係に影響を及ぼし，それらをコントロールしようとする個人または集団による試み」（p. 19）と定義されている。

2）本章で，傾向 tendency は上述の効果 effect とほぼ同義語として用いられている。

3)（*6*)の誤記と思われる。

4）Sack 前掲書，訳注1の第1章参照。

5)（*9*)の誤記と思われる。

6）今回の翻訳部分には含まれていない。

注

1）距離の効果を独立させる試みは，空間関係の効果を独立させるより一般的な努力の一部である。難しいのは，空間とその特性は全ての現象の一部であるが，現象と独立して計測可能であるということであった。二つの事象の間の距離は，これら二つの事象が何か，そして両者の間に何が存在するかに関わらず計測することができる。しかし，これら二つの事象の間の相互関係にその距離が及ぼすと推定される効果（重力的相互作用を除く）は，両者の間に存在する事物のタイプ，より正確には相互作用が生じることを可能にする媒体によって変化する。もし，2人の人物が普通の会話を交わしたいと思い，3フィート離れているという現象があるとしたら，その媒介物は通常音声を伝達する2人の間の空気である。もしその空気が止まっていなければ，距離は3フィートより短くなければならない。換言すれば，たとえ媒介物から独立して距離を計測することができても，距離の効果は特定の媒介物から独立して一般化できない。言及される物体ないし媒介物に関わらず，距離ないしその他の空間的特性に意味を付与することは，空間の意味について過度に一般化することに等しい。この過度の一般化は空間の非相関的な概念と呼ばれている：Robert Sack, *Conceptions of Space in Social Thought: A Geographical Perspective* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1980), pp. 80-1.

2）一つの主要な例外，つまりニュートンの重力方程式を除いて，媒介物は物理的過程における距離の役割に影響する。ニュートンによると，二つの質量の間の重力は，それらの規模に直接比例し，両者の間の距離の二乗に反比例する。こうした距離の逆効果は，介在する物質の有無によって変化しない。距離自体は，絶対的に，そして物体から独立して，重力が持つ引力に影響する。しかし，これは，ニュートン物理学の中でさえ，距離がそうした効果を持つ唯一の例である。そして，このシステムは，以来相対性理論によって，距離が力の場であり，空っぽの空間ではないという効果へと再定式化されている。空間分析に関心を持ち，影響力のある地理学者と社会学者には，不幸にも他のもっと適用可能な例を排除して，この一つの例に集中し，それを人間の相互作用に及ぶ距離の効果として用いる者がいた。彼・彼女らの定式化は「社会物理学の法則」と呼ばれ，重力のもつ引力に関するニュートンの方程式が主要なモデルの基礎となっている。彼・彼女らが示した基本的なモデルは距離の相互作用に関する方程式で，二つの人口中心間の相互作用はそれらの人口規模に直接関係し，それらの間の距離には反比例するというものである。干渉する物体を考慮せずに距離の効果を独立させるこの種の，そして関連した試みは空間を非相関的にあつかう。そうした試みの例として以下の文献を参照。William Bunge, *Theoretical Geography* (Studies in Geography, Series C, General and Mathematical Geography, No. 1, Lund: C. W. K. Gleerup, 1966. ウィリアム・バンジ著，西村嘉助訳『理論地理学』大明堂，1970年); William Wrantz, ‘Geography of Prices and Spatial Interaction,’ *Papers and Proceedings, Regional Science Association*, 3 (1957), pp. 118-29. ランツは「時間と空間は，費用を生じる外的な摩擦としてのみならず，むしろ経済的システムの次元として見なされなければならず，ここから数理

物理学の厳密なパターンの中で，同じ構造を持つものとして扱われねばならない」(p. 128) と述べる。

3）Robert Sack, 'A Concept of Physical Space in Geography,' *Geographical Analysis*, 5 (1973), pp. 16-34.

4）何が善意であり悪意であるかについての考えうる定義，そしてこれらの定義自体がどのように規範的意味を持つかに関する多くの議論がある。地理学の文献に関する展望として以下を参照。Anne Buttimer, *Values in Geography* (Washington, D.C.: Association of American Geographers, Commission on College Geography Resource Paper 24, 1974); および Bruce Mitchell and Dianne Draper, *Relevance and Ethics in Geography* (London: Longman, 1982).

5）この点は Ryda Dyson-Hudson and E. Alden Smith, 'Human Territoriality: An Ecological Reassessment,' *American Anthropologist*, 80 (1975), pp. 21-41 によって，そしておそらく Marshall Sahlins, 'The Social Life of Monkeys, Apes and Primitive Man,' in J. N. Spuhler (ed.), *The Evolution of Man's Capacity for Culture* (Detroit: Wayne State University Press, 1959), p. 58 によって最初に示された。

6）この領域性のもつ中立性は，その最も重要な効果の一つとして J. Edney によって特定されている。彼はこう述べる。「領域性の第一の機能はまさに，その真の，そして最も有益な性質をかくもとらえどころのないものとしている。それは，よりどころとなる背景の中に消え去ってしまうことが許されるほどに十分な組織，構造，そして予測可能性を与えることである。この背景は，領域の占拠者が自らを関わらせる必要はないが，さらに高度な行動と努力の継続的発展にとって非常に重要である。領域を自然視できないのであれば，その機能と利益は劇的に減少するであろう。」 'Human Territories: Comment on Functional Properties,' *Environment and Behavior*, 8 (1976), p. 43 より。

7）W. Scott, *Rational, Natural and Open Systems* (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1981), p. 68.

8）Edward Soja, *The Political Organization of Space* (Washington, D.C.: Association of American Geographers, Commission on College Geography, 1971)がこれらの，そしてその他の人類学的視角を展望している。

9）James D. March (ed.), *Handbook of Organizations* (Chicago: Rand McNally and Co., 1965) 内の各所。

10）空間を概念的に空であると考えるが，それを幾何学的に記述できるとする近代の様相は，Robert Sack 前掲書，注 1 で議論されている。

11）具象化と転置は，象徴と指示物の融合として記述されるものと同様の効果を生み出す。Robert Sack 前掲書，注 1，特に第 6 章，そして M. Mauss, *A General Theory of Magic* (London: Routledge and Kegan Paul, 1972)の特に第 3 章参照。

12）本書の第 6 章ならびに以下の文献を参照。R. Edwards, *Contested Terrain* (New York: Basic Books, 1979); M. Katz, 'Our Origins of the Institutional State,' *Marxist Perspectives*, 4 (1978), pp. 6-22; および S. Marglin, 'What Do Bosses Do? The Origin and Functions of Hierarchy in Capitalist Production,' *Review of Radical Political Economics*, 6 (1974-5), pp. 36-60.

13）J. Pressman and D. Wildavsky, *Implementations: How Great Expectations in Washington are Dashed in Oakland* (Berkeley: University of California Press, 1973); G. Vernex, 'Overview of the Spatial Dimensions of the Federal Budget,' in N. Gluckman (ed.), *The Union Impact of Federal Politics* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1980), pp. 67-102.

14）S. Aguren, 'The Volvo Kalmar Plant' (Stockholm: The Rationalization Council, Swedish Information Services, 1976); および F. Emery and E. Thorsud, *Form and Content in Industrial Democracy* (London: Tavistock, 1969).

15）Max Weber, *The Theory of Social and Economic Organization*, trans. by A. Hanerson and T. Parsons (New York: Oxford University Press, 1947).

16）K. Wittfogel, *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power* (New Heaven: Yale University Press, 1957. カール・A・ウィットフォーゲル著，湯浅赳男訳『オリエンタル・デスポティズム―専制官僚国家の生成と崩壊』新評論社，1995 年).

17）Weber 前掲書，注 15，pp. 333-4.

18）D. Pugh and R. Pyne, *Organizational Behavior in its Context: The Aston Programme III* (Westmead: Saxon House, 1977); および Joan Woodward (ed.), *Industrial Organization: Behaviour and Control* (London: Oxford University Press, 1970).

19）Robert Michels, *Political Parties* (Glencoe, Ill.: The Free Press, 1949).

20）Robert Merton, *Social Thought and Social Structure* (Glencoe, Ill.: The Free Press, 1957. ロバート・マートン著，森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房，1961 年).

21）ヘーゲルに対するカール・マルクスの著作を参照。そしてマルクスと官僚制についての議論は，A. Giddens, *Capitalism and Modern Social Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, 1971. アンソニー・ギデンズ著，犬塚先訳『資本主義と近代社会理論―マルクス，デュルケム，ウェーバーの研究』研究社出版，1974 年), pp. 237-8 参照。

22）G. Konrad and I. Szelenyi, *The Intellectuals on the Road to Class Power*, trans. by A. Arate and R. Allen

(New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979); Andras Hegedus, *Socialism and Bureaucracy* (New York: St Martin's Press, 1976), 特に第 1 章; Serge Mallet, *Bureaucracy and Technology in the Socialist Countries* (Nottingham: Spokesman Books, 1974); そして Ernest Mandel, *On Bureaucracy: A Marxist Analysis* (London: I.M.G. Publications, 1973).

23）M. Dear, 'Theory of the Local State,' in A. Burnett and P. Taylor (eds.), *Political Studies From Spatial Perspectives* (New York: John Wiley, 1981), pp. 183-200; K. Newton, 'Conflict Avoidance and Conflict Suppression: The Case of Urban Politics in the United States,' in K. Cox (ed.), *Urbanization and Conflict in Market Societies* (Chicago: Maaroufa Press, 1978), pp. 76-93; および R. Walker and M. Heiman, 'The Quest Revolution for Whom?', *Annals, Association of American Geographers*, 71 (1981), pp. 67-83.

24）Frederick Engels, *The Origin of the Family*, Property and the State (New York: International Publishers, 1972. フリードリヒ・エンゲルス著，土田保男訳『家族・私有財産・国家の起源』新日本出版社，1999年). 第3章でさらに詳述するように，原始的という用語は，ここでは軽蔑的なものを意味しているのではなく，むしろ，文明発生前に存在し，近い過去までいくつかの社会集団に存続した社会組織の形態を意味するものである。原始的という用語のイデオロギー的な要素については，以下を参照。Stanley Diamond, *In Search of the Primitive* (New Brunswick, N.J.: Transaction Books, 1974).